

カントに於ける根本悪の問題

野島孝司

カントは『単なる理性の限界内に於ける宗教』(一七九三年)に於いて悪の問題を人間本性に於ける根本悪(Das radikale Böse)の問題として論じているが、何故にカントは悪の問題を論じなければならなかったのか、そして根本悪とはいかなる悪であり、カント哲学に於いて根本悪の問題を論じる意義は一体、どこに存するのであろうか。まずもって我々は何故にカントが悪の問題を論じなければならなかったのかという問題から考察を始めたい。

カントは、純粹実践理性の根本原則である道徳法則に従うことによって自由にして善なる意志が確立するという道徳論を論じていた。この道徳論はそれ自体では宗教の立場を問題とはしないが、道徳法則が課する人間理性の究極目的としての最高善の理念を実現するということを問題とする場合のみ、その道徳論は宗教の立場との関連性をもってくるのである。最高善の理念は睿智的にして感性的であるという二つの側面をもつ人間の道徳的にして理性的な在り方の問題と深く関係をもち、カントはこのような二つの側面の総合的に統一された人間の実践的な在り方の原理をこの最高善の理念による道徳的秩序に求めるのである。このように最高善の理念を問題とすることによって道徳論は宗教の立場へ、つまりあらゆる我々の義務を神の命令として認識することへと至るのである。そしてこのような宗教の立場に立つことによって人間は道徳法則の主体としての人間の在り方を深く自覚することとな

るのである。その自覚は道徳法則の主体として道徳的秩序による在り方を自らの課題とするということであるが、同時にそのような在り方に反していくような在り方を問題とすることとなり、道徳法則に違反していくところに、カントは罪や悪の問題を見いだすのである。

『宗教論』に於いてカントが論じる人間本性に於ける悪の問題とは、人間が善なる格率を採用するのか、あるいは道徳法則に違反する悪しき格率を採用するのかという人間の自由なる選択意志による格率の採用に関わる問題なのである。そしてその格率採用の最初の根拠を人間の内に含むことによって、人間は人間として人類という性格を示し、さらにその性格は、格率採用による善悪の問題が人間にとって生得的(angeboren)であるということを示すのである。このように論じられる善悪の問題は、道徳論の立場では自由の問題は自らが律する道徳法則に自らが従うという『自律としての自由』として論じられてきたのに対して、宗教論に於いては人間の意志による『選択としての自由』として論じられていることを示すのである。この点に『宗教論』に於ける自由論が道徳論に於ける自由論よりも高次の問題として論じられていると指摘される所以であろうが、さらに『宗教論』に於いては人間存在が睿智の側面と感性的側面との二つの側面をもつという問題が道徳論の立場よりも、人間存在の本質にとって必然的でより根本的な問題として論じられていると言えるであろう。

従ってカントは、このような二つの側面をもつ人間本性に於いては道徳法則の遵守を促す善への根源的素質が内在すると共に、人間本性に悪への性癖(Der Hang zum Das Böse)を内在すると論じているのである。そしてその悪への性癖という概念は、傾向性の

可能性の主観的根拠であり、悪への性癖そのものが直ちに惡となるようなものではない。むしろ惡への性癖は、人間の自由なる選択意志による格率採用が道德法則から逸脱する可能性の主観的根拠であり、格率の主観的根拠を腐敗させるが、決して人間の力によって根絶えしすることができないのである。従ってカントは人間本性に於ける生得的にして根本的な惡への性癖を惡への自然的性癖と名付ける。

しかしながら惡がこのような傾向性の可能的根拠としての惡への自然的性癖によるとしても、そのような傾向性にとらわれ引きずられていくのは、睿智的な次元に属する人間の自由なる選択意志であり、選択意志の自己決定によって自らが招いた惡に外ならないがゆえに、カントは睿智的所行 (intellektuelle Tat) として論じるのである。そしてこのようなカントの論述に於いて、人間が根本惡の引責的な行為的主体であるということをはっきりとしてくるのであり、カントが論じる根本惡とは、人間にとって生得的であると共に、引責的にして主体的な惡なのである。そこにカントが根本惡を道德的惡として論じる所以が存するのである。しかしながら道德的な善惡の問題が人間の自由なる選択意志に基づくにせよ、カントの論じる惡がもつ生得的に根本的ということに對して『選択としての自由』はいかなる関連性をもつのであろうか。ここに根本惡がもつ人間本性に對する根本性が示されるのであるが、この問題については今後の私の課題としたい。

カントはこのような道德的惡の根拠を道德法則の主体として格率を採用する場合、本来的には道德法則こそが自愛の原理を満足させる最高条件であり、選択意志の普遍的格率の内に唯一の動機

として採用されるべきであるにもかかわらず、自愛の原理に引きずられてその原理を道德法則を遵守することの条件としてしまい、人間の自由なる選択意志によって道德的秩序を転倒してしまうことに求めるのであり、そしてこの転倒は人間の積極的な惡意というよりも、人間本性の内に内在する自愛の根深さと人間の意志の脆さによるということを指摘するのである。では、何故にこのような道德的秩序の転倒を起こすような惡への性癖が人間本性に於いて存するのかという問題は我々には探求し得ない問題であるとして残されるのである。

しかしながら惡の根拠が選択意志による道德的秩序の転倒に求められる点に、カントは惡の克服の可能性をも見いだすのである。ではいかにしてカントは人間にとって生得的であり根本的である惡を克服することが可能であると論じるのであろうか。この問題を通じて、カントは『人間理性の限界内』に於いてイエス・キリスト論を論じていくのである。

私は、今年度の研究に於いて根本惡のもつ根本性と人間理性との関連性に関する問題、あるいはカント哲学に於ける根本惡の思想がもつ意義とは何かという問題を明らかにすることはできず残したままであり、さらにカントが『あらゆる我々の義務を神の命令として認識すること』として宗教を定義付する意義についても再考察する必要も感じている。そしてこれらの問題を通して、カントの論じるイエス・キリスト論を明らかにしていき、その点より『単なる理性の限界内に於ける宗教』と題するカントの宗教論の立場へと迫っていきたいと思うのである。